

聖書：創世記 23：1～20

説教題：サラの葬り

日時：2023年11月5日（朝拝）

前回の 22 章でアブラハムの信仰の生涯の総仕上げとしての究極的なテストについて見ました。アブラハムは見事にこのテストを乗り越え、すべてにまさって神を愛し、神に信頼し、神を恐れていることを明らかにしました。残る部分はアブラハムの生涯の終わりをまとめる記録となっています。今日の 23 章では妻サラの死と葬りが記され、24 章では息子イサクの結婚、25 章ではアブラハムの死と葬りが記されます。そしてここにも彼の信仰の光が輝くのを私たちは見ることになります。

まず今日の 23 章はサラの死に関することです。サラはアブラハムの妻としてずっと一緒に歩いて来ました。振り返ればそれは激動の生涯でした。75 歳の時に神から召命を受けた夫アブラハムに従って生まれ故郷を後にして信仰の旅に出発しました。子を与え、あなたを大いなる子孫とすると約束されましたが、なかなか実現しません。サラは夫に従う歩みの中で二度ほど異邦人の王に召し入れられるという危険な目にも遭いました。また人間的に焦って子を得ようとしてかえって自らの家に災いをもたらしたこともありました。またどんどん年月が経過する内にもはや自分を通して子を得ることなど考えられない状況となって、来年あなたから子どもが生まれるという神の使いの言葉を聞いても一笑に付すようなこともしてしまいました。しかし 90 歳の時に奇跡的に約束の子を出産しました。彼女が死んだのは 127 歳だったと 1 節にありますから、イサクはその時 37 歳頃だったと考えられます。イサクは 40 歳の時に結婚したことが 25 章 20 節から分かりますので、その 3 年前までサラは生きていたことになります。彼女は息子の結婚までは見ることはできませんでしたが。それでも子孫を与えるという神の約束の小さな成就是見ることができました。

しかし土地に関する約束はどうでしょう。カナンの全土を与えると約束されましたが、それはまだ全く成就していません。先に見たベエル・シェバの井戸一つは所有しましたが区画された土地は全く持っていません。いまだに寄留者生活です。そんな状態で死にました。これはどう考えたら良いのでしょうか。神は力が弱くて約束を果たすことができなかったということでしょうか。その神を信じて歩んだサラの一生は哀れだったと言うべきでしょうか。果たしてアブラハムはサラの死を前にしてどうだった

のでしょうか。

まず記されているのは、アブラハムは「サラのために悼み悲しみ、泣いた」ということです。この後見るようにアブラハムは死を乗り越える希望に生きていました。しかしだからと言って泣くのは不信仰であるということではありません。アブラハムの人生においてこれまで重要な位置を占めていた人がいなくなったのです。その人はもう傍らにいません。そのために悲しみ、泣くのは当然のことです。イエス様もラザロの死を前にして「涙を流された」とヨハネの福音書 11 章 35 節に記されています。愛する者の死を前にして涙することは許されていることであり、人間感情としてごく自然なことです。アブラハムもそうであったとまず記されています。

しかしそれだけではありませんでした。人間的に考えれば神の約束を信じて歩んだのに、その実現を見ないまま死んだことは残念なこと、がっかりするようなことです。そのことで神を責め、苦々しい思いになってもおかしくないと思います。しかしアブラハムはそうでなかったことがここに書かれています。彼はサラを葬るための墓地を取得しようとします。特にそれをカナンの地の中に持とうとしたというところに今日の箇所のポイントがあると思います。彼ら夫婦はこの時はヘブロンにいました。マムレの榿の木があるヘブロンはアブラハム夫妻にとって長く関係のあった場所です。13 章でロトと別れて生活することになった時、アブラハムはこのヘブロンにあるマムレの榿の木のそばに来て住みました。また 18 章で 3 人の御使いを通して、来年サラに男の子が生まれるという約束を聞いたのも、このマムレの榿の木のそばでした。色々な思い出が詰まった地です。その周りにはヒッタイト人たちが住んでいました。このヒッタイト人は創世記 10 章 15 節から分かる通り、ノアの 3 人の息子の内のハムから生まれ出た子孫の一つであり、ハムの子カナンの子どもたちの中に「ヒッタイト」の名があります。つまり彼らはカナン人の中の一民族でした。アブラハムは彼らと交渉します。三つの場面がここに 있습니다。

まず第一の場面は 3~6 節です。アブラハムはヒッタイト人たちに妻を葬るための墓地を譲っていただきたいと願い出います。自分はこの地に寄留している者、つまり土地を持っていない者です。これに対してヒッタイト人たちは 6 節で次のように答えました。「ご主人、私たちの言うことをお聞き入れください。あなたは、私たちの間にあって神のつかさです。私たちの最上の墓地に、亡くなった方を葬ってください。私

たちの中にはだれ一人、亡くなった方を葬る墓地をあなたに差し出さない者はおりません。」ここにアブラハムが周りの人々から高く評価されていたことが分かります。アブラハムには確かに神がともにおられること、そして彼を祝福しておられることを先住民たちは見ました。その彼を敬い、彼らは最上の墓地を選んで亡くなった方を葬ってくださいと言います。しかしアブラハムはこれで良しとはしませんでした。彼は私有の墓地を持ちたいと考えていました。土地は他人のままで、ただそこに葬らせていただくというのでは不安定。後々様々な義務が発生し、異教的習慣に引き込まれるかもしれません。アブラハムは彼らの好意を感謝して一礼し、交渉を続けます。

第二の場面は7～11節です。ここではエフロンの畑の端にあるマクペラの洞穴を譲ってくれるようにと場所を特定して願い出ます。19節から分かるように、そこはアブラハムが長く生活したマムレに面する場所でした。彼は十分な値の銀と引き換えに、私有の墓地として譲ってほしいと願い出ます。この時、エフロン自身がその場において、取引が行われる町の門で皆が聞いている前で次のように答えたと言っています。

「いいえ、ご主人。どうか、私の言うことをお聞き入れください。あの畑地をあなたに差し上げます。そこにある洞穴も差し上げます。私の民の者たちの前で、それをあなたに差し上げます。亡くなった方を葬ってください。」これを私たちはどう見るべきでしょうか。単純に寛大な言葉として感謝して受け止めて良いのでしょうか。ある人はこれはアブラハムの願いをはぐらかす答えだと見ます。エフロンとしては売りたいとは思っていなかった。貸す話に持って行きたかった。そこでこのような言い方をしたのだと見ます。また他の人はこれは売りますよという意志の遠回しの表現だと見ます。売るつもりはあるが直接的にはそうは言わない。そして彼は洞穴だけではなく畑地も一緒に購入してもらおう話へ持って行こうとしていると見ます。アブラハムはもう一度一礼し、さらに交渉を続けます。

第三の場面は12～18節です。アブラハムは畑地を含めて、その分の銀を払うと言います。彼としてはあくまで私有の墓地とすることにこだわりました。するとエフロンは言いました。15節：「では、ご主人、私の言うことをお聞き入れください。銀四百シェケルの土地、それなら、私とあなたの間では、何ほどのこともないでしょう。どうぞ、亡くなった方を葬ってください。」この400シェケルという金額はどう見るべきでしょう。ほとんどの注解者は、これは法外な値段だっただろうと言います。エフロンは最初から高い値段で売りつける魂胆で話に応じていたとある人たちは見

ます。あるいは売るつもりはなかったと見る人たちは、この値段さえつけば相手は買わないだろう、それでも買うというならそれでも良しとするという態度であったと見ます。アブラハムはエフロン申し出を受け入れます。値切る交渉はしませんでした。彼としてはいくら払っても、ここを自分のものになりたいと思っていました。こうしてこの取引は町の門に入るすべてのヒットライト人たちの前で正式にアブラハムの所有となりました。アブラハムはマムレに面するこのマクペラの畑地の洞穴に妻サラを葬ったことが最後の 19～20 節に記されています。

以上の箇所は私たちに何を語っているものでしょうか。これは単にアブラハムがサラを葬るための墓地を取得し、そこに彼女を葬ったという記録ではありません。私たちがここに読み取るべきは、これは彼の信仰の行為であったということです。まずはっきり分かることはアブラハムは妻サラを約束の地の中に葬ったということです。妻サラが死んだことを受けて考えられる一つの選択は、彼女を生まれ故郷の地に葬ることです。かつて生活したハラシに、あるいはさらに遡ってカルデアのウルに葬るという選択も普通の人間の感覚ならあるはずですが。しかし彼はそうしませんでした。ここで強調されているのはアブラハムはこの約束の地をまだ少しも得ていないのに、この地に妻を葬ったということです。23 章の 2 節と 19 節では、彼女を葬ったヘブロンが「カナンの地にある」とあえて注釈されています。ヘブロンはそういう注釈がなくても十分に分かる町なのに、わざわざヘブロンは「カナンの地にある」と 23 章の最初と最後に繰り返して強調されています。つまりそういう意図、そういう信仰を持って、アブラハムはこの地に彼女を葬ったということです。その際、他人から土地を借りた状態ではいつひっくり返され、他の場所に移されることになるか分かりません。ですから確実にここにとどまり続けることができるように彼は私有の墓地を取得したのです。自分たちは必ずこの地を受け継ぐのだという信仰の表明としてです。

またこの行為には死を越えてなお存在するいのち、復活を信じる信仰が示されていると言えます。死ですべてが終わりだと考えるなら約束の地に彼女を葬ることはほとんど意味がない行為となります。しかしアブラハムはこれで終わりとは考えていませんでした。この後がある。神との関係は死で終わりとはならない。神はなお彼女を支え、生かし、約束を果たしてくださる。この世の人生がすべてではない。むしろ本当に良いものはこれから来る！と。彼は地上の人生をこのように見ていたので、地上では自分は寄留者で良いとしたのです。もしこの世がすべてなら、このような高齢にな

っても寄留者の状態であることは我慢ならないことでしょう。しかしまだこの先があるのです。死の向こう側においてこそ神の約束は成就します。その信仰に立って彼は希望を告白して自分の妻を約束の地に葬ったのです。

そして私たちはこのアブラハムの信仰の目は、天に向けられるものであったことをヘブル人への手紙 11 章 13～16 節からはっきり知ります。「これらの人たちはみな、信仰の人として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるか遠くにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり、寄留者であることを告白していました。そのように言っている人たちは、自分の故郷を求めていることを明らかにしています。もし彼らが思っていたのが、出て来た故郷だったなら、帰る機会はあったでしょう。しかし実際には、彼らが憧れていたのは、もっと良い故郷、すなわち天の故郷でした。ですから神は、彼らの神と呼ばれることを恥となさいませんでした。神が彼らのために都を用意されたのです。」ここにアブラハム、イサク、ヤコブといった族長たちは天の故郷にこそ憧れていたとあります。彼らはカナンの土地を与えることと約束されていましたが、カナンの土地全部を得ることが最高の望みだったではありません。ローマ人への手紙 4 章 13 節に、アブラハムに与えられた約束は「世界の相続人となる」という約束だったと言われています。つまりカナンの土地だけではないのです。カナンの土地は神が将来与えてくださる究極的な祝福を予表するものでした。カナンの豊かな土地を与えることを通して神はご自身が持つ祝福を惜しみなく彼らに与えることを示そうとされました。それは言い換えれば神の御前にある世界全部を受け継ぐことと言っても良いのです。この約束は最終的にはヨハネの黙示録 21 章に示されている新しい天と新しい地を受け継ぐことにおいて成就します。このような霊的な目、信仰の目をアブラハムは持っていました。その信仰のもとに彼は妻サラを約束の地に葬ったのです。神との関係は死によって破れることはなく、むしろ死を越えて神は私たちを真の祝福へと導き入れ、永遠の住まい、天の故郷に迎え入れてくださると信じて。この墓に後にアブラハム自身も葬られます。そればかりかその子イサク、その妻リベカ、またレア、そしてヤコブと葬られて行きます。このことは彼らが皆、アブラハムと同じ信仰に立って地上の生涯を全うしたことを表しています。地上の命が終わりになることは、約束のものを受けるときにおいて何の妨げにもならないことを彼らは証したのです。

私たちは今日の箇所から何を学んで自分に当てはめたら良いでしょうか。改めて今

日の御言葉から学ぶことは、この世がすべてではないということです。もしかすると私たちはこの世の事柄に重きを置きやすいかもしれません。地上でどれだけ祝福を受けるかで神の祝福を測ろうとするかもしれません。しかし先ほど読んだヘブル書 11 章で族長たちは「約束のものを手に入れることがなかった」と言われていました。彼らは地上では寄留者でした。もちろんこれはこの世で祝福を受けてはならないということではありません。神はこの世でも祝福をくださいます。それを感謝して受け取って良いのです。しかしこの世で私たちが受けるものがベストのものではありません。むしろ約束のものを信仰の先達たちは地上で「受けなかった」と言われていることを私たちは良く心に留めるべきだと思います。ですからもし私たちがこの世の祝福を得ることにあくせくし、それを得て満足しているなら危険であるということにもなります。それは信仰の先輩たちの生き方と根本的に違っていかと問われます。むしろ彼らから学ぶことは先のものに目を向けて生きることです。本当に良いものはこれから来ます。そこに向かって進む私たちはこの世においては寄留者です。そのことを覚えて身軽でなくてはと思わされます。信仰の目はいつもアブラハムのように天の故郷に向け、そのために今地上で持てるものを賢く用いる者でなくては！と思わされます。コロサイ人への手紙 3 章 2 節：「上にあるものを思いなさい。地にあるものを思ってはなりません。」 マタイの福音書 6 章 19～20 節：「自分のために、地上に宝を蓄えるのはやめなさい。そこでは虫やさびで傷物になり、盗人が壁に穴を開けて盗みます。自分のために、天に宝を蓄えなさい。そこでは虫やさびで傷物になることはなく、盗人が壁に穴を開けて盗むこともありません。」

そうして天の故郷を目指して歩みつつ、地上を離れる時が来た時、いよいよ大きな望みを告白する者でありたいと思います。私たちは愛する人との一時的な別れを悲しんで良いのです。しかしテサロニケ人への手紙第一 4 章 13 節でパウロが言っているように、他の望みのない人々のように悲しみに沈んではならない。その先にある大いなるものにいよいよ目を高く上げ、神が導いてくださる道へと進む者でなければなりません。アブラハムら族長たちに倣って私たちも地上の事柄を通していつも天の故郷を見つめ、日ごとにそこに近づく喜びを告白する歩みをささげる者たちでありたいと思います。そして死においても神が与えてくださっている希望を証しし、神とともに歩む幸いへと人々を招く歩みをささげる者へ導かれてまいりたいと思います。